

<東亜日報、1992年6月19日(金曜日)>

経東・九山道清 製薬技術—医業の二人の「名人」

壬乱¹ 400年、「韓民族の魂」日本に生き続けている

子孫たちは秘法を引き継ぎ様々な名薬開発

錦技術も伝え産業発展に貢献

すでに紹介したように文禄の役の間中に多くの朝鮮の技術者が日本に連れられていった。彼らの中では陶工が一番多かったが、豆腐製造や樟脳製造のような技術者以外にも医者や薬師も稀に含まれていて、彼らの痕跡を見つけることができたのも今回の調査の成果の一つである。その中で、九州の佐賀市にある浄土宗鏡圓寺の墓地から日本製薬業界でも有名な九山道清の墓を見つけて調査団は彼が残した業績の大きさに驚いた。

佐賀県教育庁の岩崎輝明参事の案内で鏡圓寺の墓地で見つけた九山道清の墓はまるで薬湯器²をいくつか積んだような形ですぐ目に付いた。墓地の中央には家族墓があり、その一番先にある彼の墓の前には「九山道清 正保4(1647)丁亥年 9月」という死亡年代が5段の石碑の中の一番下段に薄く掘り込まれていた。

墓碑まで薬湯器の形で造ったぐらい有名な薬師であった九山道清は文禄の役の終わりの頃、日本に連れられてきた。彼はすでに佐賀に定着していた朝鮮人の頭の李宗歆の助力で唐人町(朝鮮人の定着した村)に居住しながら先祖から学んだ製薬技術を発揮した。佐賀藩主の鍋島直茂から製薬免許をもらった彼は九山という名字も得たほど佐賀では産業部門で大事な存在だった。

彼が活動した唐人町は佐賀県庁と駅をつなげる中心地になっている。しかし、それに関する記録が佐賀県図書館に大切に保存されているため、彼の子孫について簡単に把握することができた。系図によると九山道清は小川藤左衛門の娘と結婚し、彼の息子の代からは小川と名字を変え、5代目には息子がなくて江口五右衛門を入り婿にしたという。

彼は九山道清が朝鮮から持ってきた薬師如来像と製薬秘法の全てを伝授されたが、彼の玄孫の兵右衛門時代に、また江頭と名字を変え今日に至っている。

調査団を案内した岩崎は「毎年彼の子孫である江頭民雄が1回か2回、鏡圓寺に九山道清の墓に参拝しに来て、彼が朝鮮から持ってきた薬師如来像を今でも持っている」と語った。しかし、彼は江頭が東京の世代谷に住んでいることだけ知っていて連絡先は把握していなかったため、調査団を残念がらせた。

九山道清によって始まった製薬業はこのように子孫を経て様々な名薬が開発されたと記録で伝わっている。佐賀県図書館には九山道清に関する文書ファイルもあったが、特に明

¹ 文禄の役

² 薬を入れる素焼きの器

治維新以降、既存の製薬会社の許可を改める過程で具体的な薬の名前が書いてあり関心を集めた。

1875年佐賀県庁で発行したこの文書には奇応丸、神效丸、黒子丸、振薬、美髪丹、齋薬、吸齋薬、三蔵園、地黄丸、薄荷園など、10種類の薬品の名前を挙げ、「この薬は従来から販売されていて、検査した結果、何の後遺症がなかったため免許を出していただきますようお願いいたします」との内容が書いてある。

一方、九山道清は錦製造と染色技術も佐賀一帯に伝えたことが調査で分かった。ここの錦は「道清更紗」、「高麗更紗」、「鍋島更紗」と呼ばれたもので、五彩の華麗さを誇った。明治中期に紡績業が発達しはじめ、20世紀初に機械化に押し出されるまで錦製造は、この地方の重要な産業の一つだった。

このように製薬と錦製造の伝授を通して、佐賀の産業発達に大きく貢献したため、九山道清は財力を積んだと同時に名声を博したが、彼の墓がある鏡圓寺も自ら創建した寺院であった。実際に佐賀県博物館の小宮暁之副館長を初めとするこの地方の有識者たちは、九山道清の業績について詳しく知っていた。また、文禄の役の記念館を立てている名護屋城跡の調査研究室の関係者も来年、竣工される記念館に九山道清の関連資料を展示する予定だという。

佐賀に連れられてきた李参平が焼物を通して当時の産業発達に大きく寄与したように、九山道清は製薬業を通して大きく寄与したのである。

<洪鐘泌、明知大・京都大(客員)教授、韓国史>

名医だと噂が全国に広がり患者が門前市を成す

同僚の漢医者に睨まれ毒殺される

豆腐製造方法を四国に伝えた朴好仁の業績を「皆山集」から調べている中、高知一帯で医者として名声を博した経東という名医がいたことを確認することができた。日本語では「キントン」と発音される経東について「皆山集」の著者松野尾童行は彼がどれだけ名医であったかについて逸話を通して明らかにする一方、毒が入った食べ物を食べて最後を迎える内容を詳しく伝えている。

「皆山集」によると経東は1595年慶州で捕らえられ、土佐藩主の長宗我部元親によって日本に連れられて来て、現在の高知県新居村で開業したという。開業の初期は、高知が亜熱帯気候の上に風土が違うところで育った薬草で処方したため、1年間は誤診の連続だったと伝わる。

朝鮮で名医だった経東は自分の医術を恥じて休業し、風土に合う薬草の研究を積み重ねて再び開業し、「百発百中の治療」をすることによって名声を積むことができた。「皆山集」の内容の中で彼が優れた名医であったことを説明する場面を見ると…。

「ある日、ある妊婦が経東に往診を頼み、脈をとってみると胎児は男児だった。しかし、

『胎児の健康がよくなく、産まれても 3 歳を越せないため、今のうちに薬を服用しなければいけない』と勧めた。そうすると、夫は怒りながら『服脈だけとってそういう診断をするなんて、デタラメではないか。どうやって医者が 3 年後の病気を予言できよう』と難詰し、二度と往診を頼まなかった。薬を服用せずに産まれてきた男児は、言われたとおり 3 歳になると顔色が悪くなり、病状が現れた。彼の両親は慌てて経東をお願いしたが、彼は『すでに時を逃したため、望みはない』と言って、投薬すらしなかった。男児は亡くなった」

少し大げさな部分もあろうが、この逸話で経東の名声が博されると、藩内の外の医者から憎まれ、死に至る結果を生む。藩主の長宗我部元親が京都に行くとき、彼は随行することになり、彼の名声は京都でも知られていて診察を希望する患者で門前市を成した。

このような状況になると、現地の医者たちは殺害の計画を立て、毒が入った夕食を用意して経東を招いた。このとき、経東は医者を経験からご飯に毒が入っていることを知り、「食べ物に毒が入っていることは、よく知っている。解毒は簡単である。しかし、今日私が死ななければ、あなたたちは後日、私を剣で殺すだろう」と言い、懐から本を一冊取り出し火の中に入れた。「万民を助ける漢方の秘訣だが、あなたたちの手に入ってほしくないので燃やした」と言った後、食事をして亡くなったと伝わる。経東の弟子の中に粉川寺の僧侶であった粉皮春興を大切にし、彼に各種の資料と医療器具を渡したと伝わる。

江戸末期、高知に住んでいた「皆山集」の著者松野は郷土史学者で有名だが、彼は経東の医術が弟子たちに伝わり高知と京都の医学発展に多大な功を立てたと評価している。

<韓国日報、1991年12月3日(火曜日)>

有田に拉致された陶工李参平

恨みを沈めながらくべた火、「陶祖神話」を生み…

土を掘り出していた谷、磁石鉱がそのまま

墓地の立て札の名前「金江」に変えさせられ …魂まで捕虜人か

文禄・慶長の役は「陶磁器戦争」とも呼ばれた。朝鮮白磁の清雅な光彩と美しい線を欲しがっていた大名たちが目を光らせて陶工たちを拉致してきたことを指す言葉だ。

そのように連れられてきた数多くの陶工の中で公州出身の李参平が日本で初めて磁器を焼き出した有田という町は日本を代表する「陶郷」として有名である。

薩摩焼、唐津焼、八代焼、高取焼、萩焼、など九州一帯の有名な陶磁器ブランドは全部このとき連れられてきた朝鮮陶工が始祖ではあるが、磁器を作ったところがここだけだったので、一番の「陶郷」になったのだ。

唐津から南に約40キロを高速バスで走ると人口1万5000人余の陶磁器の町、有田だ。馬耳山³に似ていてつんつん尖がっている峰は平べったい丘陵がつながっている九州の山勢と違うところだ。磁器の原料になる磁石鉱が発見されたのも山勢と関係があるようだ。

狭い山谷に沿って一の字の形で形成された街をしばらく歩き登ると上有田駅だ。この小さい駅の右側に低い山が町を見下ろしている。李参平の業績を称える陶山神社だ。

「陶祖の丘」とは花崗岩の階段を10分くらい登ると山頂に「陶祖李参平碑」が凛々しく立っている。

1616年李参平が有田の泉山で磁石鉱を見つけて、日本で初めて磁器を作り出したことと共に「1917年有田陶磁器創業300年を記念し、陶祖李参平碑が立てられ、毎年5月4日になるとここで陶祖祭が開催されています」と案内板が立ってある。白い陶板の上に韓国語、日本語、英語の3ヶ国語で書いてある。

駅から右側に少し離れたところに李参平が見つけた磁石鉱に4百年の間、採掘された巨大な穴が残っている。穴の直径は百メートルを超えるように見え、深さは数十メートルくらいに見えた。1917年、陶祖李氏頌徳会が立てた「李参平発見地磁石地」という碑石の横に陶工たちの碑も立ってあった。昔の窯の壁面を切って作ったレンガでできた合同頌徳碑である。

李参平は有田中心部の北側の山峡、彼が初めて作った窯(天狗谷窯)の側の共同墓地に眠っている。5百坪くらいに見える墓地の真ん中に、常に生き生きとした花が供えられているところが彼の墓である。

「史跡代金江三兵衛(李参平)墓碑」の立て札がなかったら雨風で摩滅されて半分しか残っていない碑石の持ち主が誰なのか分からなかったはずだ。立て札の側面には1967年3月20日にこの墓地が史跡に指定されたと書かれてある。

彼の名前が「金江」と書かれてあるのは、日本に連れられてきた後、鍋島藩がそのよう

³ 大韓民国全羅北道鎮安郡にある山

に改名させたからである。この墓を史跡に指定する 50 年前に立てた頌徳碑には「李参平」と表記したことに比べ、「金江」と書いて、括弧の中に本名を書いた理由を説明してくれる人はいなかった。

彼がこの名前を持つことになった由来は忠清道錦江出身であるからだ。「錦」よりは「金」を好んだせいとか、それとも勘違いされたかは確かではない。彼の子孫たちは、正確でない記録に基づき、先祖の故郷を忠清南道公州の鶴峰里と推定し、昨年 10 月にそこに記念碑を立てた。彼の 14 代子孫の金江省平(30)が去る 8 月にソウルで展示会を開いた後、鶴峰里に訪れたことで有田の人々の「先祖探し」は一段落ついたといえる。

国内の美術史家によると、鶴峰里出身の李参平は広州にあった官宮陶磁器工場で働いていたときに拉致されたと推定されるだけで、正確な年代と経緯は明らかになっていない。

拉致した大名は、現在の佐賀県の領主であった鍋島直茂で、時期は 1594~1596 年くらいと考えられる。

鍋島の監視下で主に生活陶器を焼いていた彼が磁石鉱を見つけたのは、連れられてきて 20 年余後の 1616 年であった。人が住んでいなかった有田の泉山で貴重な磁石鉱が見つかり、鍋島はそこに窯を開かせ領地内でそれぞれ陶器を焼いていた陶工たちをここに集めた。金海から連れられてきた宗傳という名匠の未亡人(百婆仙)のもとにいた数百名の陶工もこの時、ここに移された。それから 10 年も経たないうちに有田には 40 個余の磁器窯ができ、鍋島藩は莫大な財貨を手に入れた。

細長い谷の下の 2 ヶ所に検問所を作り、外部者の出入りを厳しく統制した。磁器を作る技術を流出させないためであった。40 個余の窯で生産される磁器は北側に 10 キロ離れた伊万里にだけ運び出し、船で長崎港を通してヨーロッパ各国に輸出した。この製品を有田焼ではなく「伊万里焼」と呼んだのも秘密が流出すことを恐れたからである。しかし、秘密を守ることは不可能だった。50 年も経たないうち、有田の技術は九谷焼に流れていき、1800 年代の初めの頃には京都と会津地方まで伝わり、磁器製造の全国時代が開かれることになる。

有田陶磁器美術館を見回ると、初期有田焼は美しい線と余白を大切にした朝鮮白磁とそっくりであることが一目で分かった。しかし、年月が経つにつれ、明と清の趣が反映され、後には日本とヨーロッパ人の好みに合わせた作品に変わってしまう。

今、有田で取引される陶磁器から朝鮮白磁の痕跡を探すことは難しい。陶磁器の店に陳列されている作品は華麗な色彩と模様だけを強調した日本的なものばかりだ。年月の流れを、もっと実感させるのは工業陶器の発達だ。電気碍子や建築用陶器などを大量生産する業者が陶磁器生産業者よりはるかに多い。

狩をするように朝鮮の陶工を連れて行き、窯を破壊したため、文禄の役以降、韓国の陶芸は急激に衰退し始める。逆に、日本では陶芸文化が花を咲かせたが、朝鮮白磁しか持つことができなかつた上品な作品は作るができなかつた。上品な文化とは、それに相応しい趣と土壌の後押しがないと不可能であることを悟った有田訪問であった。

慶長の役の際、連れられてきた朝鮮人たちの集団村

「日本の中の文禄の役の傷」を調べていたときなので、今から 30 年余前のことだ。ある文献に「逆修国朝鮮工政大夫之孫金広之立石、寛永六年己巳道清禪定門、妻同国金氏妙清禪定尼八月日」と書かれてある碑が九州佐賀市の郊外にあり、道清の墓地は唐人町の鏡圓寺にあると書いてあった。

唐人町は慶長の役の際、鍋島直茂が韓国から連行してきた 180 名が住んでいたところで、寛永六年は 1629 年である。国交が正常化され 22 年が経ち、5 年前には第 3 次朝鮮通信使が日本に行ってきたが、どうして故国に帰れなかったのか。この時期の問題について勉強してからあまり経っていなかったのも、こういう疑問を抱くようになったのである。

何日か後、20 時間余汽車に乗って佐賀駅で降り、鏡圓寺を訪問した。僧侶が驚いた顔で「どうして分かったのですか」と言いながら、道清夫婦の墓地に案内してくれたことは、今でも記憶に残っている。

西日本各地に唐人町という地名は数多く残っている。福岡市と佐賀、熊本、鹿児島、高知、徳島の各市にあり、唐津と小倉、広島、岡山、姫路、宇和島にも連行してきた韓国人の村があった。連行された韓国人がどれくらいだったかは正確には分からないが、3 万人は超えたと考えられる。

彼らを探し出し、朝鮮に連れて行くことが初期通信使の任務の一つであり、仁祖 21 年(1643 年)の第 4 次通信使まで約 7500 人が帰国しただけで、数多くの方が道清夫婦のように異国の地である日本でこの世を去った。

どうして彼らは連行されて、正常化後にも帰国できなかったのだろうか。連行の原因は文禄の役、日本軍を朝鮮に上陸させた後、空いた船で帰っていったら風波で沈没する船が次から次へ発生したからである。これにより、慶長の役の際には、老若男女と関係なく手当たりしだいに連行し、船に乗せて帰った。それで、武将たちの領地に集団村の唐人町を作ったのである。

ところで、当時の文化・技術水準は朝鮮のほうがはるかに高かった。例えば、陶工たちの手で西日本各地から陶磁器が作られるようになったことはとても有名である。

象嵌は「肥後(熊本)象嵌」「加賀(金沢)象嵌」が有名で、鹿児島に連行された鄭宗官は樟腦の製造法を考え出した。樟腦は毛織物の防虫剤で、しばらくしてから長崎のオランダ商人を通して輸出商品の 1 位を占めるようになった。李参平が伝えた磁器技術で成り立った「伊万里焼」の名声はヨーロッパまで知られるようになった。

1607 年の国交正常化後、徳川幕府は韓国人を故国に帰らせるように命じた。しかし、大名たちは、自分たちの藩の産業発展のために、彼らの存在を隠していた。

通信使の通路であった福岡藩の場合も例外ではなかった。1624 年の通信使が藍島(今日の相島)に寄港したときだった。一人の韓国人の女性が子供を連れて現れ帰国したいと申し出たが、副使姜弘重の『東槎録』には彼女の行った言葉を次のように書いている。

「被擄人与我同在一处者、成一村落、皆思帰而不得」

この女性がいう「成一村落」は今も地名として残っている唐人町であった。

故国を忘れられるはずがない。18世紀後半、鹿児島県の苗代川部落を訪問した橘南谿は、その際の話『西遊記』という本に書いたが、この村は1598年に連行された男女43名でできて200年経っていた。しかし、彼らは韓国の服装と風俗を守っていて申倅屯は「故郷とは忘れられないもの」だと言ったと伝わる。

サハリンの同胞問題が新聞に出るたびに、筆者は唐人町の人々の悲劇を思い出す。